

筆に込めるのは、 書道への揺るぎない情熱と尊敬



力強いタッチ、柔らかな筆の動き。文字の美しさはもちろん、古典書道をベースとした芸術的な作風に思わず目が留まる。商品ロゴや社訓、ウェルカムボード、自らの感性を生かしたアートなどを生み出す書道家・佐藤佳奈さんの作品は、見る者の心をひとつたびつかむと離さない。取材に伺ったのは、佐藤さんが主宰する「毛筆デザインオフィスフデサイン」。数々の作品が生まれるその場所でお話を伺った。

書道への探究心に導かれて

佐藤さんが書道をはじめたのは小学2年生のとき。「いつも遊んでいた友達が書道教室に行き始めたので、遊ぶ人がいなくなっちゃうと焦って。それなら私もついて行こうと同じ教室に通い始めて、気が付いたら書道にはまっていました」。本格的に書道を自分の未来として考えるようになったのは高校生になってから。「書道部の顧問の先生の影響でした。初めて芸術としての書道を教えてくれた方なんです。書道の奥深さをもっと知りたい」と思い、大学は教育学部の書道科に進学しました。

書くかにもこだわる。墨の濃度、その日の天気、そして書き手の気持ちでさえも影響してくる、繊細な作業だ。「でも、どんなに難しかったお仕事もお客さまの喜んだ顔を見ると一瞬で吹き飛んでしまいます。お客さまの喜びが私の何よりの栄養です」。

手書きの威力を伝えていきたい

2〜3年に1回は東京で個展を開催するなど意欲的に制作を進める一方で、新たなビジョンも描いている。「かつての自分のように、大学の書道科を卒業しても書道関連の仕事に就いていない人がたくさんいます。そういう人たちを集めて、書のプロフェッショナル集団を作りたいんです。そして、書くという文化を後世につなげていくお手伝いがしたいと思っています。何気ない言葉でも、手書きにするともすこい威力を発揮します。それを知ってもらい、この先も少しずつ、文字の力を伝えていきたいです」。



女性のヘアスタイルを筆で描いた作品。おかつぱやポニーテール、三つ編みなどさまざま。近々個展に出品の予定も

回り道が気付かせてくれた、揺るぎない情熱

就職先は、東京の雑貨店。十数年ぶりに書道とは関係のない世界に踏み出した佐藤さんの毎日は、刺激的なものだった。しかし、書への思いはふいにやってくる。

大学では、書道の基礎を学んだ。「就職を考え始めたとき、自分は本当に書道が好きなのか自信がなくなりました。書道を仕事にするだけの情熱が私にあるのかと、何度も自問自答して出した答えは、一度書道と距離を置こうということでした」。

「同僚が自分の名前を書くのが苦手だという話になって。それなら少し習っていたから教えてあげる、と。久しぶりに書道に向き合ったとき、心の底から楽しいと思えたんです。この思いにかけてみよう、と直感しました。まずは基礎から学び直そうと、すぐに筆耕会社に転職し、「からのスタートを切ったんです。お給料は少なくて、2万円くらいしかもらえないときもありました。それでも不思議と嫌ではなくて。日々上達していると実感できることが何よりうれしかったです」。

いずれは秋田に戻って仕事をする、そ

う決めていた。自分に

は書道を仕事にできるほ

どの情熱がある、そう確信した

1年後に、秋田へと拠点を移した。

帰ってきたばかりの頃は仕事が少な

かったが、知り合いの紹介で書道教室を

開いたり、イベントがあれば参加したり

と徐々に活動の場を広げていった。帰郷

から12年目となる今は、商品・タイトルロ

ゴ、店舗やイベントなどの書、毛筆パフォー

マンスなど多方面からの依頼が相継いで

いる。

四季折々の秋田の自然が何よりの刺激に

独特のセンスが光る作品のインスピレーションは、秋田の自然が与えてくれる。「アイデアを得たいときは、あえて何も考えずふらりと散歩をしたり、自然を眺めたりします。一番ひらめくのは、露天風呂に漬かっているとき。秋田は自然や温泉が身近にあつて、創作にぴったりの環境です。秋田で一番好きな風景は、出身地・八郎潟の夕日。小さい頃、実家の屋根に登って眺めていた景色なんです」。

一つの作品を仕上げるまでに、最も費やすのは筆を握るまでの時間。アイデアを練ることはもちろん、どの紙にどの筆